

学生の社会参加としての被災地支援活動

華井和代*

1. はじめに

ユティアー オーク

U T-OAK 震災救援団（以下、OAK）は 2011 年 4 月に東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻の学生有志が設立したボランティア団体である。宮城県南三陸町において被災地支援活動を行っている。同専攻博士課程に入学した筆者も、他の学生たちと一緒に設立に携わり、運営スタッフとして活動してきた。本稿では、OAK の活動を通じて私たちが現地で学んだこと、および、学生の社会参加としての被災地支援活動の意義を報告する。

2. 南三陸町の状況変化と OAK の活動

OAK の主な活動内容は、避難所での炊き出し、寺子屋の開催、仮設住居での生活支援、仮設団地の自治会支援、活動報告・情報発信、という 5 つである。活動内容が多岐にわたるのは、「被災地の状況変化をとらえて、その時どきに必要とされる支援を行う」という方針をとっているためである。以下では、震災後 2 年間の南三陸町の状況変化に沿って、OAK の活動を紹介する。

(1) 避難所時代：炊き出し・夏の寺子屋

南三陸町は宮城県の北東部に位置する。東は太平洋に面し、北西南の三方は標高 300m ～ 500m の山に囲まれている。こうした地形と主産業である漁業のために市街地は沿岸部に集中しており、町役場、病院、駅などの公共施設を含む約 62% の建築物が津波で罹災する結果となった。死者・行方不明者は 1,000 人を超え、2011 年 2 月時点で 17,666 人（5,362 世帯）であった人口は、2012 年 9 月時点で 15,278 人（4,791 世帯）に減少

している（南三陸町ホームページ <http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/>）。

OAK が支援活動を開始した 2011 年 5 月には、約 200 名が志津川高校の体育館で避難生活を送っていた。毎日の食事は、町や民間の支援者から提供される食材を使って、自身も被災者である避難所スタッフが用意していた。こうしたスタッフの負担を軽減し、滋養に富んだ食事を被災者に提供するために、OAK は他の支援団体と協力して週末の炊き出しを行った。初期は特に野菜や果物などの生の食材が喜ばれ、ハンバーグ、オムライス、冷やし中華などメニューにも工夫を凝らした。200 人分の炊き出しには人手が必要である。学生ボランティアを募集し、月 2 ～ 3 回計 15 回の炊き出しに、延べ 127 名を派遣した。

そうして通っているうちに私たちに求められるようになったのが、学習支援であった。家を失った子どもたちは、5 月に学校が再開してから集中して勉強する環境になかった。保護者からは学習の遅れを懸念する声上がり、「せっかく学生が来ているならば、子どもたちに勉強を教えてほしい」という要望が出てきた。子どもたちと遊ぶボランティアは避難所にすでにいたが、町のボランティアセンターを通じての派遣であるため、夕方 4 時には帰ってしまう。中高生が部活から帰ってきて勉強する時間帯に合わない。そこで私たちは、夏休みの 4 週間、避難所の一角に学習スペースを設け、1 週間交代で学生ボランティアが泊まりこんで、子どもたちの学習を支援する寺子屋を開催した。寺子屋の「先生」としては、東大に加えて、筑波大、東洋大、埼玉大の学生、合計 24 名が参加した。寺子屋の

* 東京大学大学院新領域創成科学研究科

UT-OAK 震災救援団 <http://oakkyuen.web.fc2.com/>

「生徒」としては、小中高生 22 名が入替わりで訪れ、ほぼ皆勤で通う中学生もいた。

(2) 被災地支援で直面した課題

ただし、活動を通じて得た経験は良いものばかりではない。多くの問題も目の当たりにした。震災直後の被災地では、救援物資、炊き出し、がれきの撤去といった物理的な支援が必要とされていた。一方で、全国から届けられる救援物資が分配しきれずに倉庫に山積みになっていたり、押し付けてくる大勢のボランティアの対応に避難所スタッフが振り回されるといった問題も起きていた。阪神淡路大震災と東日本大震災の大きな違いのひとつは、被災地の立地にある。特に、鉄道が流されてしまった南三陸町は、石巻や気仙沼から車で 1 時間走らないとたどり着けない陸の孤島になっていた。南三陸町で何が不足していて、どのような支援が必要とされているのかを全国の支援者が把握することは容易ではない。多くの支援者はメディアで流される情報やツイッター、Facebook でのつぶやきをもとにニーズを判断する。すると、ある物が無いという情報が伝わればそれが大量に現地に届けられ、供給過剰になって止めることができない。物資以外でも、歌に励まされたエピソードが報道されれば、毎日多種多様な歌い手が避難所を訪れ、歌って涙を流して帰っていく。聴衆が集まらないときには私たちボランティアがサクラとして動員されることもしばしばであった。それでも、被災者にしてみれば自分たちを思って全国の支援者が寄せてくれた好意を断ることはできない。感謝の気持ちを伝え続ける。そのために、何が本当のニーズなのか、外部からはますますわかりにくくなってしまふ。

OAK の支援活動でさえも、そうした供給過剰とニーズの不一致に陥った時期があった。給水・入浴・炊飯を自衛隊に頼っていた 6 月までは、炊き出しに対するニーズは確かにあった。しかし、水道が復旧し、食材の調達ルートも整備された 7 月以降、わざわざ関東から 450km を走って週末ごとに炊き出しをしに来る支援は、必要とされな

くなっていた。むしろ被災者からは、何もせずにボランティアに食べさせてもらうのではなく、自分たちで料理を作りたい、イベント続きの非日常を日常に戻したいという思いが伝わってくるようになった。それでも、「炊き出しが必要」という思い込みで活動を継続する関東や関西の協力団体を止めることはできなかった。「継続は力なり」という思いが一人歩きして炊き出しが自己目的化し、路線変更ができなくなっていたのである。結局、私たちは 8 月末の避難所解散までは炊き出しを継続し、仮設住居への入居を機に生活支援や自治会支援へ切り替えるという方法をとった。

(3) 仮設住居への移動：生活支援・冬の寺子屋

秋になると、被災地の状況が大きく変化した。8 月末までにはほぼ全世帯の仮設住居への入居が決まり、避難所が閉鎖されたのである。仮設住居には、冷蔵庫、洗濯機、テレビ、炊飯器、電子レンジ、湯沸かし器の「6 点セット」が支給されているものの、その他の生活用品は各自で用意しなければならない。冬物衣料や布団など寒さ対策も必要となる。また、抽選で入居が決まる仮設団地では、隣近所との付き合いもコミュニティ形成も一から始めなければならない。仮設住居に移ったことで孤独感を強める被災者もいる。行政だけでは手が足りず、多くの支援団体が物資配布や心のケアに尽力し始めた。

平野部の大部分が津波被害を受けた南三陸町には、大規模な仮設団地を建設する用地が残されていない。そのため、数十世帯からなる中小規模の仮設団地が、町内外の 58 ヲ所に建設された。そのすべてを網羅的にケアすることは困難を極め、特に 10 ～ 20 戸ほどの小規模な仮設団地にはなかなか支援が届かないという、支援の格差が生じていた。私たちは、南三陸町に常駐する支援団体と協力し、仮設団地を訪問して衣料品や生活用品を配布したり、心のケアを目的とする移動カフェを開く手伝いをした。

そうした中で再度 OAK に寄せられたのが、寺子屋としての期待であった。南三陸町は若者が少

ない。高校を卒業すると都市部へ出て行く若者が多く、地元で働く若者はいても、大学生を見かけることはほとんどない。震災を機に学生ボランティアが来るようになって、子どもたちには「大学生のお兄さんお姉さん」のモデルができたという。OAKには、そうしたモデルとして子どもたちと接し続けてほしい。勉強の面倒を見るだけではなく、生き方の選択肢を示してほしい。そんな要望が寄せられるようになった。加えて、冬の志津川は日が暮れるのが早い。親が仕事から帰るのを待つ子どもたちが安心して過ごせる場所の確保が求められていた。そのニーズに応える形で、私たちは冬の寺子屋の開催を決定した。南三陸町で3番目に大きな志津川中学校仮設団地の集会所に1週間交代で2週間、学生が常駐し、子どもたちの学習支援を行った。仮設団地内で寺子屋を開くことで、子どもたちが安心して過ごせる場所を提供し、勉強だけではなく、生活を共にすることで子どもたちとの結びつきを深めていった。学生ボランティアの大学での専攻に興味を持ち、子どもたちの間でドイツ語がブームになるなど、学習の幅も広がった。冬の寺子屋には、東大、東洋大の学生が合計9名参加し、毎日15名前後の小中高生が訪れた。

(4) 震災から1年：関東での報告活動

震災から1年を機に、私たちは関東での報告活動にも注力し始めた。2月には支援者を対象とする報告会を開催し、5月には東大の学園祭での報告会、6月には国際開発学会での研究報告を通じて、OAKの活動の意義、被災地支援活動のあるべき姿を議論した。1年間の活動を通じて見えてきた現地の様子を、関東の支援者に伝え、被災地への関心を維持することも私たちの役割のひとつと考えたのである。OAKの活動を知った中学高校から依頼をもらい、講演も行った。「被災地」支援が「人」に寄り添う支援になるためにはどうしたらいいか、「人」の顔が見える支援の大切さを伝えるよう尽力した。

(5) 支援格差の発生：仮設調査・夏の寺子屋

春には、新入生を迎えての仮設生活支援を開始した。仮設団地での「お茶っこ」ボランティア、めかぶ収穫の手伝いなどをしながら、約30カ所の仮設団地を訪問し、住民のくらしの実態把握に努めた。降雪によってボランティアの足が遠のいていた冬を越えると、南三陸町の58カ所の仮設団地では、規模の大小、アクセスの良し悪し、加えて自治会の受援力（支援を受ける側が支援を活用する力）の強弱によって、支援の格差が拡大していた。大規模で幹線道路から近い仮設団地は支援の効果が目に見えやすいために支援が入りやすい。また、たとえ小さな仮設団地でも、自治会の情報発信力が強く、支援団体とのネットワークがある場合には、支援が入りやすい。他方、アクセスが悪い小さな仮設団地や、自治会の受援力が弱い仮設団地には、ほとんど支援が来ないという差が生じていた。

こうした格差に対処するために、2012年8月の寺子屋は、小規模仮設団地を含む5カ所で開催することを決めた。宿泊所は1カ所に定めて、9日間交代で10名ずつの学生が常駐し、1日おきに5つの仮設団地を回って寺子屋を開催した。場所によっては、もともと子どもの数が少ないために、1日5～6人ほどしか来ない寺子屋もあった。しかし、数ではなく一人ひとりの子どもを大切にすることを重視した寺子屋になった。

南三陸町でも、NGOや財団の後援を受ける団体が活動している。しかし、そうした団体はなるべく多くの被災者を支援することを重視するため、受益者が少ない小さな仮設団地は対象にしにくい。OAKには、そうした隙間を埋める役割が期待されるようになっていた。

(6) そして現在：自治会中心の自立支援へ

今冬は、仮設団地自治会主催の芋煮会や祭りを支援し、4つの仮設団地で冬の寺子屋を開催した。支援団体が主導していた以前のイベントとは異なり、現在は仮設団地の自治会が主体となって企画・運営をし、不足した機材の手配な

どを支援団体が手伝う形式に変わってきている。

行政機能が破壊されてしまった南三陸町では、復興計画の策定、住民との合意形成、計画実施のいずれもが遅れている。交通アクセスが悪いためにボランティアの数は減り、「石巻モデル」と評される石巻災害復興支援協議会のようなボランティアの連携はできていない。しかし、そうした悪条件の代わりに、「自分たち自身でこの町を復興しなければ」という住民の意志は強く、住民による自治会活動にボランティアを巻き込むという参加が促進されている。

ボランティア過剰から、ボランティア激減、住民主導へと変化してきた南三陸町の2年間を、私たちはつぶさに見てきた。「まち」を形成する住民の力を、理想論だけではなく、一筋縄ではいかない住民の合意形成、行政との調整の難しさ、それでも挑み続ける住民の強さをそばで見えてきた。「コミュニティ」というものがどう形成されているのかを学ぶ絶好の機会であったと感じている。

こうした地域密着型の支援が評価され、2013年3月には東京大学の総長賞（課外活動）を受賞した。

3. 学生の社会参加としての被災地支援

後援団体を持たない学生ボランティア団体が2年にわたる被災地支援を続けることは、決して容易ではなかった。東大にはボランティア活動の単位互換はない。メンバーはみな、大学院の授業と課題をこなし、各自の研究を抱えながら、被災地支援活動に尽力してきた。なぜ、大変な思いをしながらも活動を続けるのか。

兵庫県出身のメンバーは、阪神淡路大震災のときに被災し、ボランティアの支援を受けた経験を持っている。幼いながらも支援のありがたさは身にしみておぼえていて、受けた恩を社会に返したいのだと語る。一方、アメリカで13年を過ごした帰国子女のメンバーは、日本の危機に際して身を粉にして働くことで、日本人としてのアイデンティティを取り戻したいと語る。

私たちが支援しているのは、南三陸町の人々

そのものだけではない。自分が生きるこの社会が、人と人が支え合う社会であってほしいと願い、その社会の中で自分も誰かを支える存在でありたいと願って活動に臨んでいる。私たちは南三陸町の復興に参加することを通して、もっと大きな社会づくりに参加しているのである。

OAKの設立メンバーは、この春に大学院を卒業して就職する。おそらく、被災地の復興に関わる仕事に携わる可能性は低いだろう。それでも、OAKの活動が社会に対する彼らの理解を深め、その中での自分の役割を考える機会を提供できたのならば、彼らはこれから社会の有為な形成者になっていくだろう。被災地支援という社会参加を通して、社会で生きる人としての「信」が形成されたのではないかと自負している。

最後に、「東日本大震災に社会科はどう向き合うのか」という問いへの示唆として、二つの可能性を提示したい。第一に、被災地支援という社会参加へと若者を先導する役割を社会科が担うことである。すでに、課外活動として被災地を訪問したり、ボランティアに参加するプログラムを実践している学校は数多くある。そうした活動を通じて生徒たちが社会参加に踏み出すきっかけを社会科で作っていききたい。第二に、被災地の復興を生きた教材として活用することである。破壊された「まち」をいかにして住民の力で再生していくか。そのまちづくりを日本全体がどう支えていくのか。自分たちの問題として考える教材にしたい。本稿におけるOAKの活動報告がその一助となれば幸いである。

文献

- 遠藤薫編『大震災後の社会学』講談社、2011年
- 中原一步『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』朝日新書、2011年
- 西山むん『がれきの中にできたカフェ』明石書店、2012年
- 村井雅清『災害ボランティアの心構え』ソフトバンク新書、2011年
- 『南三陸町からの手紙』（作文集）

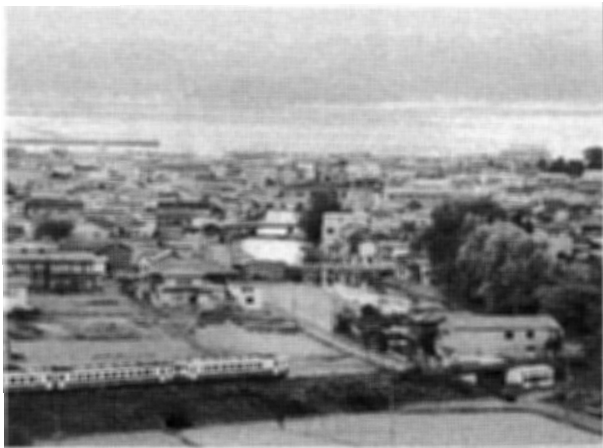


写真 1 町の中心部（震災前）

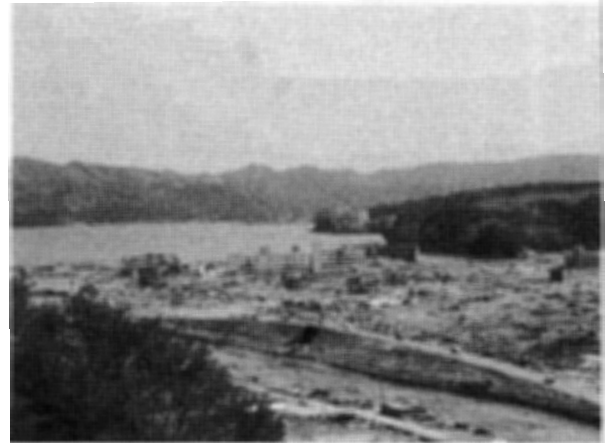


写真 2 町の中心部（震災後）



写真 3 避難所での炊き出し



写真 4 仮設集会所での寺子屋



写真 5 めかぶの収穫



写真 6 仮設集会所でのお茶っこ

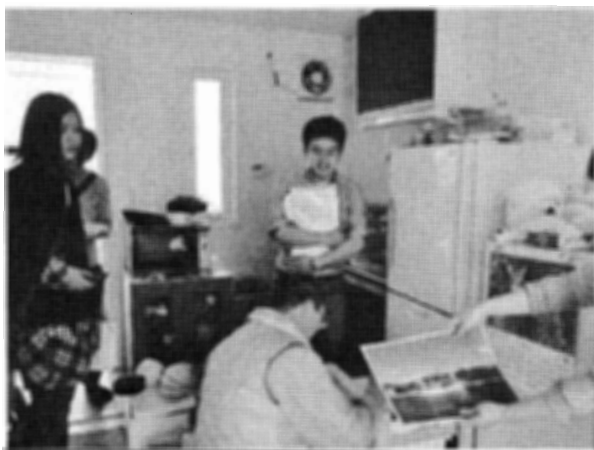


写真 7 仮設団地での聞き取り



写真 8 学校での講演会